

SPEED箱根セミナー 講演要旨①

未踏科学技術協会の「エコイノベーションとエコビジネスに関する研究会」(SPEED)、会長・山本良一(東京大学名誉教授、東京都立大学特任教授)は先月26日から3日間、毎年恒例の合宿セミナー(共催・ケーズホールディングス、日本興亜損害保険、日本興亜おもいやり倶楽部、写真)を、神奈川県箱根町の小田急山のホテルで開催した。今回は「地球(すべての生命の家)のグランドデザイン」を総合テーマに、会員企業や学識経験者ら約50人が参加し、計23件の講演やパネル討論が行われた。その主な講演要旨を連載で紹介する。初回は山本教授の講演。

(編集委員・工藤真一)

ノーベル化学賞受賞者 在の地質年代名の「更新類が実質上、地球を改変し支配しつつあることを認め、惑星管理責任を深く自覚した上で、例えば、技術ユートピア主義

を単なる対象として捉え、生命操作や気候改変を乱暴に行うようであれば、技術ユートピア主義

が渾弊である。かつて重源上人は、奈良の東大寺の再建を作善の業として行ったと言われている。この環境胎蔵曼荼羅は、「エコロジカルな懺悔と回心」に基づき、エコプロダクツの開発、環境CSR経営の推進、エンカル(倫理的)購入など、「作善の業」の実践を推奨するものである。



環境曼荼羅で「作善の業」を推奨

気候変動問題を気候工学のような手段で、積極的順応管理により解決しようとし、世界に衝撃を与えた。人類が地球環境を順応管理するとしても、自然

のそのしりは免れないだろ。特に「草木国土悉皆成仏」の思想的伝統のある日本人には相当の違和感がある。天台宗の半田孝淳座主と真言宗の松長有慶座主が12年に



山本良一 東大名誉教授

対談され、「魂宿る自然と生きる」というメッセージとともに、自然との共生を改めて強調されたことは、大日経の三句の法門に「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす」とあるが、松長有慶座主によると「仏の知恵」というものは、仏と衆生が一体となっている本来のあり方が基盤となり、衆生救済に向かう悲が根本となり、それらが社会的な実践活動として実を結ぶことが究極の目標となっている」と解説され

を示していると思われる。環境胎蔵曼荼羅では、その中心に「幸運なる宇宙と奇跡の惑星・地球」を置き、それを取り囲む四仏として、惑星スチュワードシップ、環境マネージメントシステム、共生、社会的責任を取り上げた。まず地球全体についての管理経営責任(惑星スチュワードシップ)を深く自覚し、環境マネージメントシステムを

実践し、人間と自然、人間と人間、現在の世代と将来の世代間の3つの共生の倫理を身に付け、広く社会的責任経営を實踐することが求められる。すなわち、惑星スチュワードシップで発心し、環境マネージメントで修行し、共生の倫理を身に付けて菩提を得、あらゆる組織経営は社会的・環境的配慮を行いながら実践する境地に到達すること